

A Study of English Teaching Methods in Early Childhood with an Emphasis on Communication : Through the Practice of English Education at a Nursery School and English Class for Children

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 五十嵐, 淳子, IGARASHI, Junko メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1259

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



乳幼児期におけるコミュニケーションを重視した 英語の指導法の一考察

— 保育園及び幼児英語教室の英語教育の実践を通して —

A Study of English Teaching Methods in Early Childhood with an Emphasis on Communication

Through the Practice of English Education at a Nursery School and English Class for Children

五十嵐 淳 子

IGARASHI, Junko

本稿では実際に英語教育を取り入れている複数の保育現場の観察を通して、どのような英語の実践が行われているのかを明らかにし、乳幼児期の英語教育において、コミュニケーションを重視した指導法や指導内容について考察した。乳幼児期の英語教育におけるコミュニケーションを重視した指導法は、今回取り上げたリスニング、スピーキング、リーディング、ポキャブラリー等、それぞれに適した様々な指導方法があるが、共通事項として、子どもが英語活動を楽しみ、コミュニケーションを図る楽しさを感じ、満足できる活動にしていくことが重要であることが明らかになった。筆者が観察した保育園及び幼児英語教室ではそれぞれの全てのクラスで英語の歌を取り入れていたが、英語の歌を通して言葉だけでなく体で表現する楽しさも一緒に味わうことで、子どもが繰り返し歌いたいという気持ちになること、さらに、子どもの日常に即した身近な題材を導入し、子ども自身の自らの経験と英語を結び付けやすくすることが必要であることを確認することができた。

1. はじめに

幼稚園や保育園で英語教育の需要が高まっている。そこには乳幼児期から英語に慣れ親しみ、外国の文化に興味をもってほしいという想いや2020年から全国の小学校で英語が科目として導入されることも背景にあると言えるだろう。例えば、多文化理解や英語を話す機会として一学期中6日間や英語教師が主導

する時間を設定している園が挙げられる¹⁾。また、日常の保育にも英語圏出身の英語教師を配置している園や0歳児から6歳児まで全ての年齢で週一回の英語教師による英語の時間がある園や課外活動として英語教室等を園内に設置している園もあり、保育の現場での英語教育のあり方は多岐に渡っている。

Cameron (2005) は、子どもの言語習得には教師が文法もしくは対話について説明する

キーワード：保育、英語教師、子ども
Key words : childcare, English teacher, children

ために使うことができるメタ言語を学ぶような大人が学習する道のりがないことを示唆している。また、子どもは大人が新しい言語を話すような恥ずかしいという感覚が欠けるため、さらにネイティブのようなアクセントを習得する助けとなることを言及している。Curtain & Dahlberg (2015) は、2歳から4歳の年齢の子どもは言語発達に敏感に反応する時期であり、言語を楽々と吸収し、話す音の真似に適應することを言及している。幼稚園や保育園の子どもは同じアクティビティーやゲームを繰り返す忍耐力があり、日常生活どの経験を反映した活動によく反応する。そして、このような子どもの特徴が言語学習において有利に働くことを示唆している。乳幼児期は言語の発音が習得しやすいこと、また、子どもの興味や経験がある学習やアクティビティーを繰り返し行うことは効果的であることが明らかになっている。

『保育所保育指針解説』（2018）では、乳幼児期に言葉への感覚を豊かにすることや言葉を交わすことの楽しさを十分に味わう重要性を提唱している。『幼稚園教育要領解説』（2018）においては、領域「言葉」の内容における取り扱いとして、「幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。」と言及している。保育園や幼稚園の子どもたちの生活の中で、保育者や子ども同士のコミュニケーションを通して、言葉を使いながら楽しいと思える体験が重要となる。このことは日本語だけでなく英語においても共通していると考えられる。英語教育を取り入れている保育現場が増えている状況を鑑み、乳幼児期における英語教育の現状を調査する必要性を感じた。

そこで、本稿では実際に英語教育を取り入れている複数の保育現場の観察を通して、どのような英語の実践が行われているのかを明らかにし、乳幼児期の英語教育において、コミュニケーションを重視した指導法や指導内容について考察する。

2. 研究方法

研究方法としては、フィールドワークとして複数の保育園や幼児英語教室における英語活動の観察を通して、乳幼児期の保育現場ではどのような英語を実践しているのかを踏まえ現状について明らかにする。各保育園及び幼児英語教室の観察日時、観察場所、観察対象は以下のとおりである。

（1）A 幼児英語教室（東京都三鷹市）

- ① 観察日時：2019年3月18日10：00-15：00、15：30-17：30
- ② 観察場所：A 幼児英語教室（東京都三鷹市）
- ③ 観察対象：3歳児8名（男児4名、女児4名）、スタッフ4名
4歳児4名（男児3名、女児1名）スタッフ3名

A 幼児英語教室では、3歳児クラスをpre-school（プリスクール）、4歳児クラスはpre-advanced school（プリアドバンススクール）として開講されている。英語教師は英語母語話者で外国人が担当している。補助の教師は英語母語話者や日本人が担当している。3歳児クラスは1日4時間で開講されている。保護者が負担する費用としては、入会金が2万円、週1回であれば月謝は21,000円、週2回は36,000円、週3回は48,000円、週4回は60,000円となる。教材費は半年分で6,000円となっ

ている。定員は12名のところ13名が在籍しているが、観察日の3歳児クラスは13名中8名の参加であった。3歳児クラスはまだ幼稚園に通園していない子どもを対象としているため、10時30分～14時30分までの4時間となっている。4歳児クラスの定員は10名であるが、観察日は4名の参加であり、そのうちの1名は入会希望の見学として保護者と子どもが参加しており、計4名の子どもが参加していた。

費用については、入会金が10,000円、教材費が半年分で6,000円、月謝は週1回2時間であれば14,000円で週2回であれば、23,000円である。4歳児クラスは幼稚園が終わってから幼児英語教室に通う子どもを対象にしているため、15時30分～17時30分の2時間で行われている。午後15時30分からクラスが始まるが、15時頃から教室内では音楽がかかっており、教室に入った子どもから好きな遊びをしていた。15時30分～16時までは好きな遊びをする時間となっている。観察日は子どもの参加は4名であったが、教師は英語教師1名と補助の教師2名で計3名であったため、教師それぞれが子ども一人ひとりに接することができており、手厚い教育が行われている印象を受けた。

(2) M保育園（認可保育園）神奈川県

- ①観察日時：2019年3月19日9：50-11：00
- ②観察場所：M保育園（認可保育園）神奈川県
- ③観察対象：0歳児、1歳児クラス10人（男児6人・女児4人）保育者4人
2歳児、3歳児の合同クラス17人（男児8人・女児9人）保育者4人
4歳児、5歳児の合同クラス22人（男児10人・女児12人）保育者2人

M保育園の特徴は0歳児から5歳児まで在園しているが、3歳児や4歳児の段階で幼稚園に移る園児がないとのことで、教育活動を充実させているとのことであった。そのため、英語活動も一般的には3歳児から行っているところが多いが、0歳児から始めているとのことであった。英語活動の費用は保育料に含まれている。英語教師は外国人のネイティブスピーカーが担当しており、英会話スクールから派遣されている形態である。英語を行うクラスは3クラスに分かれており、0歳児・1歳児の合同クラスは9時50分～10時までの10分間、2歳児・3歳児合同クラスは10時～10時30分までの30分間、4歳児・5歳児クラスは10時30分～11時までの30分間で行われている。

(3) H保育園（認証保育園）東京都品川区

- ①観察日時：2019年5月21日10：00-11：00
- ②観察場所：H保育園（認証保育園）東京都品川区
- ③観察対象：0歳児クラス3人（生後9か月の男児2人・生後6か月の女児1人）保育者2人
1歳児クラス8人（男児4人・女児4人）保育者2人
2歳児クラス6人（男児2人・女児4人）保育者2人

東京都品川区にある認証保育園で0歳児から2歳児までが在園している。英語活動の費用は保育料とは別に徴収しており、一人あたり1ヵ月3000円となっている。英語教師は英会話スクールから日本人の英語教師が派遣されている。英語の時間は1週間に1回であり、0歳児クラスは10時～10時10分までの10分間

で、1歳児クラスは午前10時10分～10時30分までの20分間、2歳児クラスは10時30分～11時までの30分間で設定されている。

3. リスニングの指導法

(1) TPRを取り入れた活動

子どもの英語教育におけるコミュニケーションを重視した指導法として、Pinter (2017) は、英語は母国語と同じようにリスニングとスピーキングの強化から始めるべきであると提唱している。また、スピーキングとリスニングを主なスキルとして教える理由としては、子どもは書くことにまだ不慣れであり、それほど読み書きに自信がないことから、多くのリスニング練習を始めることや教室内で豊かなインプットする機会は、自然にスピーキングへと導いていくことに繋がっていくことを示している。リスニングの指導法の一つとしては、Total Physical Response (TPR) があげられる。言語学習方法として1960年代にアメリカで発達したTPRとは聞いた言葉を身体全体で表現する方法であり、日本語では「全身反応教授法」と呼ばれている。文脈や状況が具体的な命令形の文章に対して、学習者は体で応答することで言葉の意味を体得し言語を習得していくことができる。

M保育園の英語の時間では、TPRが取り入れられていた。0歳児・1歳児合同クラスでは、子ども達が輪になって“walk and stop”の活動をした。教師が“walk”と声がけしながら、輪になって歩いていた。教師が“stop”と声がけすると一斉に止まるということを繰り返した。子どもは歩いて止まるという活動が楽しい様子で、笑顔や笑い声が溢れていた。2歳児・3歳児合同クラスでは、教師が“Touch your eyes.”と発話すると、子ども達

は目を触る。“Touch your nose.”と伝えると、子ども達は鼻を触る。“Close your eyes.”と伝えると目を閉じて、“Open your eyes.”と声がけし、子ども達は目を閉じる動作を行い、補助として一緒に参加している保育者も同じ活動を行っていた。指示と動作は徐々に難しくなっていく、子ども達は教師や保育者を見ながら行っている子どももいた。次の指示語としては、“Wash your hands.”や“Brush your teeth.”そして、“Brush your hair.”と伝え、最後は“Wash your face.”の動作を行った。最初は英語教師と一緒に動作を行うが、徐々に教師は動作を伴わず声のみとなり、指示された動作を子どもができていかどうかを確認していた。

H保育園では、M保育園と同様に1歳児クラスでTPRを取り入れていた。教師が“Let's stand up.”と声掛けして、“Walking”の言葉を繰り返しながら、子どもの手を引きながら歩くように促した。保育者も子どもの手を取りながら、歩く動作をすると、子ども達全員が自然に輪になりながら歩くことができた。次に英語教師が“Stop.”と声掛けし、全員が止まったところでTPRの活動は終了となった。

同じくA幼児英語教室でも3歳児クラスでTPRが取り入れられていた。音楽がかかると、英語教師は音楽に合わせて円を描くように歩き始め、英語教師の後に続き、子ども達全員で輪になった。英語教師が“Walking”と声がけすると子ども達が歩き始めた。“Jumping”といえば飛び跳ねて、“Running”と言いながら走るというように、言葉と動作を一緒に行っていた。英語教師は子ども達が歩く動作から走る動作に変えると、“Nice running everybody!”や“Good job!”等の声掛けを

していた。子ども達は音楽に合わせて体を動かしていくことは、楽しい様子で誰も飽きることなく、全員が行っていた。

TPRを使用したアクティビティーでは、耳からのインプットと身体活動の両方を活用することで、より多くのコミュニケーションができる。TPRは、体の動きとリスニングが繋がっており、学習者は口頭の応答なしで、意味がわかる自然な英語を数多く聞くことができる。小学校の外国語活動における「聞くための指導法」としてもTPRを活用したもので代表的なものは“Simon says” “Listen and clap your hands” 等があげられている。これらのアクティビティーは教師の言葉に応じて、子どもの理解が正しくても間違っても関係なく、聞いて理解し、それを行動でしめさなくてはならない。Pinter (2017) は、これらのアクティビティーは、教師にとって子どもが何を理解して、何が理解できていないのかを映し出しやすいことを示唆している。

横田 (2011) は、小学校の外国語活動における聞くことの指導について、児童の「英語で聞いてみよう」という態度を育てる指導の必要性について言及している。また、外国語活動を指導する基礎としてコミュニケーションできる雰囲気をクラスの中に作り出すことを示している。M保育園では英語母語話者の英語教師が保育室に入った途端、子ども達は非常に喜んでくれている様子がうかがえた。英語教師が醸し出すリラックスした雰囲気の中で、体の動きと一緒に言葉を聞くことで、子ども達の笑顔や生き生きとした表情を見ることができた。英語教師が話す言葉を聞きながら、子どもにとって英語に触れる楽しさが広がっていくことが重要であると考えられる。

4. スピーキングの指導法

(1) 英語の歌について

Curtain & Dahlberg. (2015) は、最もスピーキング能力を伸ばす方法として、スキットや歌をあげており、子どもは劇や歌、スキットを子ども同士や他のクラスに披露することが大好きであることを述べている。また、小学校で歌われる歌は、動作やダンス、物語を伴うものが多く、歌には韻を踏んだものやリズムがあり、歌うことでボキャブラリーやチャンク（文や意味の塊）を繰り返すことは、効果的で意義がある学習であることを提言している。筆者が観察した保育園及び幼児英語教室では全てのクラスで英語の歌が取り入れられていた。

高橋 (2011) は、小学校の外国語活動で活用されている歌には①語彙や表現に慣れるための歌と②文化的な資料としての歌と2種類を示している。①語彙や表現に慣れるためには、簡単なメロディーや繰り返しの多い歌を利用することを奨励しており、ジェスチャーや手拍子、絵カードを用いることも効果的であると言及している。②文化的な資料としての歌は、絵や写真で歌の文化的な背景を示すことを促しており、視覚教材を通して歌の内容を把握することができることを述べている。筆者が観察した保育園及び幼児英語教室では、①語彙や表現になれるための歌を取り入れており、視覚教材やジェスチャーを通して歌の内容を把握することを行っていた。さらに、高橋 (2011) が分類した小学校の英語教育で用いるテーマ別の歌の中で、実際に筆者が観察した保育園や幼児英語教室の英語の時間でも取り入れられていたものは、“Hello song” “Seven steps” “Alphabet Songs” であった。

1) M保育園での英語の歌

M保育園では、英語の時間は“Hello song”の歌で始まり、“Good bye song”で終了していた。4歳児・5歳児の合同クラスでは、教師が入るとすぐに“Music please.”と子ども達に伝え、子どももすぐに“Music please.”と繰り返した。歌の中に“Turn around”の歌詞があり、子ども達は回転する動作に喜んでいて。0歳児・1歳児合同クラスでは、日本語でも発話できない年齢のため、“Hello song”を歌っている時は、歌うというよりは、歌を聴きながら体を揺らしていた。子どもの中には保育者に抱っこされながら歌を聴いている子どももいた。“Let’s sing”“Seven steps”の掛け声と共に、“Seven steps”の歌を歌った。“Seven steps”の歌では、輪になって手を繋ぎ、1から7までは同じ方向で、次の1から7では逆方向に歩いた。英語教師と保育者が子ども達の間に入って誘導する形でゆっくりと歩きながら歌っていた。

2歳児・3歳児合同クラスでは、英語活動の最初と最後に歌を導入していた。英語教師が“Let’s make a circle.”と声を掛けて、子ども達が輪になったところで、“It’s time to say good bye.”と伝えた後に“Music please.”と発話した。教師の後に子ども達も“Music please.”と繰り返した。教師が“Let’s sing Good bye to you.”と声がけした。「さようなら」の歌については、0歳児・1歳児クラスも4歳児・5歳児クラスとも同様であり、子ども達は慣れた様子で輪になって手を繋ぎながら歌を歌っていた。

子ども達が歌を歌っている場面では、動作をつけながら歌を歌うことを繰り返す度に、子ども達の笑顔が溢れ、音楽を通して体全体を動かすことで楽しい気持ちとなり、英語が

楽しくなることに繋がっていると感じた。英語の時間に歌を取り入れる際は、歌を繰り返す時に、歌のスピードやテンポを早くしたり、反対にゆっくりしたり、大きな声や優しい声など、変化をつけて行うことが大切であり、子どもがおもわず口ずさみたくなるような工夫を盛り込むことが大切であることを改めて感じた。

2) H保育園での英語の歌

一方、H保育園でも、M保育園と同じように英語の時間は“Hello song”の歌から始まっていた。M保育園との違いは、歌が始まる前に音が出るボールを袋の中から取り出して子ども達に渡していたことであった。0歳児クラスでは、音に反応して子どもの中には泣き出す子どももいた。英語教師と保育者はそれぞれ子どもを抱っこしながら体を揺らし、音の出るボールを振りながら子どもと一緒に歌っていた。0歳児は、まだ日本語でも発話が出来ない状況であり、子ども達は歌を聴きながら、保育者や英語教師に抱っこされながら、体を揺らされている状態であった。

歌が終わると、英語教師は“Let’s clean up.”と言って、「ここに入れて」と袋を差し出した。子どもは保育者と一緒にボールを持ちながらバッグに袋に戻した。1歳児クラスでは、英語教師が子ども達に「何が入っているのかな？」と日本語で尋ねた後に「みんなにあげるね」と声掛けをした。英語教師は音が出るボールをバッグの中から取り出しながら“Here you are.”と声がけしながら子ども一人ずつにボールを手渡した。子どもの中には“Thank you.”と答える子どももおり、“Thank you.”と言えた子どもには、全員で拍手をするようにしていた。

次に英語教師が“Everyone, let’s stand up.”と声掛けした。一人の子どもが立たないので、保育者が子どもを抱っこしながら立たせるようにした。子ども達全員が立ったところで、“Hello song”の曲をかけた。英語教師が歌に合わせて音の出るボールを鳴らした。子ども中で女兒2人は英語教師の真似してボールの音を鳴らすことができていた。1歳児は歌を歌うことはできないが、体を揺らしたり、音が出るボールを振ったりすることができていた。子ども達は楽しそうに体やボールを揺らしているのを見て、英語教師が“One more time.”と声掛けして、“Hello song”の曲を再度かけた。

1歳児クラスでは、英語教師が“Tell me, How is the weather?”と質問を投げかけながら、お日様のぬいぐるみを取り出した。“Sunny”と発話しながら手で円を作り、手振りをつけながら天気単語を繰り返していた。次に、英語教師が日本語で「次は何かな」と声掛けした後に、“What’s this?”“It’s rainy.”と言いながら、雨のぬいぐるみを出して子ども達に見せた。手を上から下に動かし、雨を表す動作をした。その次は、“What’s this?”と質問し、日本語で「これは何かな」と尋ねながら、バッグの中から雲のぬいぐるみを取り出した。手で雲をつくるような動作をしながら“Cloudy”と繰り返して発話した。子どもは発話するより、英語教師の手の振りや動作を真似しようとしていた。次に“What’s this?”と声掛けしながら、風のぬいぐるみをバッグの中から取り出した。英語教師が人差し指を立たせて、人差し指を揺らしながら“Windy”と繰り返した。子どもは動作を真似していた。次はバッグの中から雪だるまのぬいぐるみを取り出し、指で雪だるまを作る

動作をしながら“Snowy”と繰り返した。子ども達は雪だるまを作る動作を真似していた。

英語教師が「みんな歌やるよ」と日本語で声掛けしながら、“Stand up please.”と伝えた。“Weather song”の曲をかけながら、天気単語の歌詞に合わせて、先ほどの動作を行った。英語教師だけでなく、保育者も積極的に歌を歌いながら体や指を動かしており、子どもが理解しやすいように、動作もできるだけ大きな動作をしていた。最初は2人の子どもが動作を真似することができていたが徐々に3人、4人と動作の真似ができる子どもが増えており、まだ動作の真似ができない子どもは体を揺らしていた。

2歳児クラスでは英語教師は音が鳴る大きいボールと小さいボールをそれぞれ手にとって、“I have a big and small.”“Which do you like? Big or small?”と言いながら子どもにボールを選ばせた。子どもがどちらか一つのボールを選ぶと、“Here you are.”と声がけしながら、子どもにボールを渡していた。子どもの中には、“Thank you.”と答える子どももいた。最初に答えた子どもが小さいボールを選ぶと、子ども達全員が小さいボールを選んでいた。英語教師は、子どもだけでなく保育者にも“Big or small?”と尋ねており、保育者は子ども達が選ばなかった大きなボールを選び“Big”と答えていた。全員がボールを手にとったところで、英語教師が“Hello.”と言いながらボールを揺らして音を鳴らした。すぐに“Hello song”の曲をかけると、子ども達はボールを鳴らすことより歌を歌うことに夢中になりながら、英語教師の振付を真似していた。

Curtain & Dahlberg (2015) は、手遊びは幼児にとって最も使用されるものであり、歌

やライムは幼稚園から大学までどの段階でも適切で元気が出る言語の救いであると言及している。さらに、歌やライムはユーモアのある活動であり、繰り返し歌うことで暗唱したくなるくらい子どもにとって大好きなものになることを示している。H保育園では、M保育園と同様に英語の時間は“Hello song”で始まっていたが、動作や手の動きの振り付けに違いがあるだけでなく、ボールを使用することで歌とボールのそれぞれの音の響きを感じるように工夫されていた。英語の歌を通して言葉だけでなく体で表現する楽しさも一緒に味わうことで、子どもが繰り返し歌いたいという気持ちになることを再確認することができた。

（2）子どもの名前を言うアクティビティー

A幼児英語教室では、3歳児クラスにおいて教師が順番に亀のぬいぐるみを渡していき、名前を聞いていくという活動を行った。子どもとスタッフが円になるように座り、亀のぬいぐるみが渡された子どもに“What’s your name?”と質問した後に“Please introduce yourself.”と促していくのだが、子どもからはあまり興味がなさそうな様子うかがえた。最初に亀のぬいぐるみを渡された女兒は、なかなか話そうとせず“Are you ready?”と促されながら、スタッフと一緒にようやく自分の名前だけを小さな声で答えた。スタッフは名前を言った女兒に対して“Good job!”と言いながら拍手をした。英語が話せる子どもの順番がきたが、あまり楽しくない様子で自分の名前を発話しただけであった。

H保育園でも1歳児クラス、2歳児クラスのそれぞれで名前を言う活動を行っていた。1歳児クラスでは、英語教師がおもちゃのマ

イクを取り出すと、泣いている子どもがマイクに興味を持ち、泣き止んだ。英語教師が“What’s this?”と声がけした後に、“It’s a mic.”と伝えた。子ども達はマイクに非常に興味を持っていた。英語教師が子ども達の前にマイクを傾けながら、“Let’s clap your hands.”と声掛けした。手拍子をしながら“What’s your name?”の歌を歌い、子ども一人ずつ順番に“What’s your name?”と尋ねた。名前を言えた子どもに対しては、拍手とハイタッチを行った。名前については、“My name is”の部分を発話できる子どもはいなかった。子どもは自分の名前をいつも呼ばれる名前でも言うこともあり、自分のことを「Mちゃん」と発話した子どもには、“Nice!”と声掛けしていた。順番に名前を言う活動を行うため、教師は日本語で「次いくよ」と言った後に英語で“Ready?”と声掛けしてマイクを渡していた。子どもの中には名前を言えない子どもやマイクを持つだけの子どももいた。

2歳児クラスでは、英語教師が“OK, Let’s sit down.”“What’s this?”と言いながら袋からおもちゃのマイクを取り出した。子どもは「マイク」と言わずに“microphone”と答えており、1歳児と2歳児の違いに発達の差を感じた。英語教師が“Hello, hello, What’s your name?”と手拍子をしながら歌を口ずさむと、一人の子どもが嬉しそうに立ち上がり、「Eちゃんから行く」と言った。英語教師は、日本語で「Eちゃんおいで」と声がけしながら英語教師の隣に来るように促した。英語教師がマイクを子どもに向けながら、“What’s your name?”と質問すると、子どもは元気良く「Eちゃんです。」と答えた。英語教師が拍手をすると、子ども達全員が拍手をした。順番に“What’s your name?”の歌を歌いな

がら、一人1回ずつマイクを持って、自分の名前を発話するということを繰り返し行った。子どもの中には元気良く名前を言える子どももいるが、恥ずかしがって言えない子どもや泣き出す子どももいた。

猫田(2011)は英語音声で指導する際の留意点として、担任が子どもの前で英語を話すことの重要性を主張している。また、担任が積極的に英語を話そうとする姿勢を見せることで子どもが英語を使おうとする気持ちに繋がることになると提唱しており、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」の面からも子どもに良い影響を与えることを示唆している。自分の名前を言えない子どもには、担任保育者が子どもの手を繋ぎながら、子どもと一緒に名前を言うようにしていた。保育者自身が英語の時間を楽しみ、子どもと一緒に積極的に参加することで、泣いている子どもが泣き止んだり、自分の名前を発話することを試みたりするようになっていた。まさに担任保育者が子どもの手本となり、良い影響を与えていることが認識できる場面であった。

5. リーディングの指導法

(1) アルファベットを取り入れた活動について

英語圏の幼稚園や小学校などで子ども達に英語をどうやって読むかを教えるのに広く使われている教育方法としてフォニックス(Phonics)がある。フォニックスを習得すると、英語の文字と音の関係のルールを学ぶことができるため、知らない単語も推測して正しく発音できるようになる利点がある。しかし、今回の観察ではフォニックスを取り入れていた場面は見られなかった。Pinter(2017)

は、教室にアルファベットを並べて、普段の基本としてアルファベットの歌を練習することを推奨している。小学校外国語活動における有効的な文字指導としては、高橋(2011)は、世界の言語の文字を知る活動、アルファベット文字を認識・理解する活動、アルファベット文字を書く活動の3点をあげている。今回観察した保育園と幼児英語教室では、フォニックスを使った活動はなく、アルファベット文字を認識・理解する活動が取り入れられていた。

M保育園の0歳児・1歳児クラスでは、アルファベットが書いてある用紙を見せながら、教師がアルファベットを発音した後に続けて繰り返して発音することを行っていた。その後で、“Let’s sing the Alphabet song”と声がけしてみんなで歌った。教師はアルファベットの活字を指差しながら歌っていた。保育者は歌を歌っていたが、子どもは歌うというより体を揺らしていた。A幼児英語教室の3歳児クラスでは、“The alphabet song”の歌を歌っていた。英語教師が口ずさむと子どもが自然に口ずさんだり飛び跳ねたりしていた。7人の子ども達に英語の発話はなかったが、何度も歌を繰り返し歌うことで、子ども達は歌えるようになっていた。英語教師が必ず子どもの側において、英語で声がけするだけでなく、子どもの安全にも配慮していた。また、アルファベットの文字の積み木が置いてあり、子どもは積み木で遊びながら文字に触れることができるようになっていた。

Cameron(2001)は、アルファベットを学習することは、歌を歌ったりチャンツをしたり、リズムカルなテンポによって、さらに楽しくさせることができると言及している。加えて、アルファベットの歌をAからスタート

することにより暗唱したり、簡単なゲームを行ったりすることは、子どもの興味を引きモチベーションの助けになることを示唆している。子どもは興味を持った文字が書いてある積み木を英語教師に見せながら、「何て言うの?」と何度も日本語で話しかけており、英語教師はアルファベットの文字を何度も発音して繰り返していた。子どもも自然にアルファベットの文字を繰り返して発話しており、遊びを通して自然に文字を認識していくことに繋がっていくことが確認できた場面であった。

(2) フラッシュカードについて

1) H保育園でのフラッシュカードを使用した活動

H保育園では、英語教師がフラッシュカードを出しながら、“This is a family.”と言ってフラッシュカードを取り出した。“father”と声がけしながら、親指を立てて「お父さん」のフラッシュカードを床に置いた。次に“mother”と声がけしながら、人差し指を立てて「お母さん」のフラッシュカードを床に置いた。指と単語を変えながら、中指は“brother”、薬指は“sister”、小指は“baby”と、“father”と“mother”を示した時と同様にフラッシュカードを床に置いた。

その後、子ども達全員に指につけられる“father”の絵が描いてある指サックを配布し、「みんな見せて。Father」と声がけした。子ども達は指サックを装着するのが楽しいそうであった。全員が親指に“father”の指サックをはめることが出来た。英語教師は次の質問として、“Who is next?”「次は誰だっけ」と尋ねると、子どもは“mother”と答えることが出来ていた。そこで、子ども達全員に

“mother”の指サックを渡した。英語教師が「次は誰かな?お兄ちゃんだよ。」と声がけした。答える子どもがいなかったため、英語教師はヒントとして「ブラ～」と伝え、子どもは“brother”と答えることができた。英語教師が「みんな見せて」と日本語で伝え、“nice.”と声がけしながら“brother”の指サックを渡した。

次に、英語教師が“Who is next?”「次は誰だっけ」と尋ねると、一人の子どもが「Oちゃん」と答えた。英語教師が「次はsisterだよ」と声がけした。子ども達は指サックを指につけるのに夢中になっており、指にはめることが出来た子どもは、「出来た」と嬉しそうに言いながら、英語教師に見せていた。英語教師は「出来たね」と日本語で声がけしながら、子どもの気持ちを受け止めるようにしていた。英語教師が「最後は?」と尋ねると、子どもは“baby”と答えることが出来た。英語教師は「Oちゃんできたね」、「頑張れ」等と子ども一人ずつに声がけをしていた。英語教師は、全員が指サックを全ての指に付けることができたのを確認した後に、「みんな見せて、father、次はmother、次はbrother、次はsister、最後はbaby」と声がけした。英語教師だけでなく、補助に入っていた保育者も「みんな見せて」と声がけしていた。

英語教師が、子ども達全員の指を確認した後に、“OK, everyone, good job!”と伝え、 “Give me father.”と声がけしながら、指サックを回収した。子どもの中には“father”の指サックではなく、“mother”の指サックを英語教師に渡している子どももいた。英語教師は、日本語を使いながら、「それはfatherじゃないよmotherだよ」等と声がけしながら“father, mother, brother, sister, baby”の

順番に回収し、袋の中に入れていくと、子どもの中には「自分で入れたい」と言う子どもも出てきた。そのため、英語教師は袋を子どもに渡して、子ども達が順番に袋を渡しながら指サックを袋に入れていく作業を行った。上手くできない子どもには、保育者が援助しながら、順番に片付けられるようにしていた。子どもが自らやりたいという気持ちを目の当たりに見ることができた。フラッシュカードやアクティビティーを通して、子どもが読むことを楽しむことは、文字に対する興味を高めることに繋がり、コミュニケーションを重視した指導として重要であることが確認することができた。

2) A 幼児英語教室でのフラッシュカードを使用した活動

A 幼児英語教室では、3 歳児クラスと 4 歳児クラスのそれぞれのクラスで、曜日のフラッシュカードを使った活動を行っていた。3 歳児クラスでは、教師が曜日のフラッシュカードを取り出し、“Sunday” から “Friday” までの単語を使用する曜日の歌である “The day of the week” を歌いながら、子ども一人ひとりにフラッシュカードを渡した。英語教師は “Who has Sunday?” と質問したが、英語が理解できる子どもでさえも、文字の区別はつかない様子で誰も手をあげる等の反応はなかった。そこで、英語教師は女兒が持っている “Sunday” のカードを指差して “look at this.” と声がけすると、子ども達はようやく理解できた様子で、指を差したカードに着目していた。英語教師が “The day of the week” の曜日の歌をもう一度歌った後に “Thank you for listening.” と伝えて曜日のフラッシュカードの活動は終わりとなった。

A 幼児英語教室の 4 歳児クラスでも 3 歳児クラスと同様に曜日のフラッシュカードを取り入れていた。英語教師が曜日の歌を歌いながら、歌に合わせて “Sunday” から “Friday” のフラッシュカードを見せた。英語教師がフラッシュカードを床に置いて、歌の順番に “Sunday” から “Friday” まで並べるとすぐに、男児達が並べたカードをかき混ぜてしまった。英語教師は困り果てた様子でフラッシュカードを再度順番に並べたが、子ども達が全く興味を示さず、個々に好きな遊びを行っていた。曜日のフラッシュカードは絵が描いていなので、子ども達には難しかったのではないかと考えられる。

(3) ボキャブラリーの指導法

1) 絵カードを取り入れたアクティビティー

M 保育園の 2 歳児・3 歳児の合同クラスにおける英語活動では、絵カードを使用していた。子どもが輪になって座った後に、最初に教師は輪の真ん中に入って、猫の絵が書かれている絵カードを少しだけ見せた。英語教師が猫の鳴き声を真似すると子どもが “cat” と何度も叫んだ。二番目に犬の絵カードを少しだけ見せながら鳴き声をすると子どもが “dog” と叫んだ。三番目からは単語が難しくなっていくので、英語教師は絵カードの動物の鳴き声を真似しながら、床に絵カードを置いていった。猫から始まり、犬、ネズミ、ハムスター、うさぎ、牛、ブタの順番に、動物の単語をそれぞれ伝えながら、それぞれの動物の単語を 4 回ほど繰り返しながら発音して子どもは英語教師の後に続いて繰り返して発音した。また、ただ繰り返して発音するだけではなく、例えば動物のうさぎであれば、手で耳を表すなど、体で動物を表現しながら、

発音するようにしていた。

絵カードを使用して、動物の名称を練習した後は、絵カードを裏返しにして混ぜ合わせて、カードが混ざり合った後に、再度裏返しにして、出てきた写真の動物を床に置いた。英語教師が“Where is the cat?”と質問した。英語教師の目の前に座っている子ども達5人に、英語教師が身振りで「おいで」というように誘いかけて、どの写真が“cat”「猫」なのかを探すように促した。子ども達は“cat”「猫」の写真を見つけて指差した。英語教師は“cat”「猫」の写真を撫でて、子ども達も真似をして写真を撫でた。絵カードはあくまでも写真や絵であって本物ではないが、より本物に近い形に近づけるようにしている教師の配慮が感じられた。Pinter (2017) は、教師が実際にある本当の物を持ってくることを推奨している。今回使用した絵カードは動物であったため、本物を見せることはできなかったが、英語教師は本物の動物のように絵カードを撫でたり触ったりして、まるで絵カードが実際の動物であるかのように扱っていた。子どもが使っている物や実物を持参して、身近な物を英語にしていけることは、日本語を介さないで語彙を理解することができるので効果的な活動である。

5人の子ども達が席に戻ると、英語教師は二番目の質問として、“Where is the dog?”と尋ねた。先ほど「猫」がどこにいるかを子ども達に尋ねた時は、手を挙げた子どもはいなかったが、今度は子ども達が自然に手を挙げるようになった。英語教師は手を挙げている子どもの手を取り、5人の子どもを集めて犬の写真を探すように促した。英語教師に呼ばれた子ども達は嬉しそうに犬の写真の前に集まり、犬の写真を撫でた。英語教師が言葉や

身振りで伝えなくても、子ども達は自然に理解して行動できていた。

次に、英語教師が三番目の質問として、“Where is the cow?”と尋ねた。子ども達は興奮しており、早く“cow”「牛」の写真を触りに行きたくて仕方がない様子であった。英語教師が手を挙げた子ども達の中から5人を選ぶとすぐに「牛」の写真の前に集まって写真を撫でた。今度は、写真を撫でるだけでなく、手振りや身振りで「牛」の真似をするように促し、英語教師が“cow”「牛」を体で表現した。子ども達はすぐに真似した。今度は全員で「牛」の真似をしながら、英語教師の後に続いて“cow”の単語を繰り返した。絵カードを使用したクイズには、先に参加した子どもではない子どもにチャンスを与えるようにしており、全員が偏りなく参加できるように配慮されていた。“hamster”「ハムスター」や“rabbit”「うさぎ」も同様に行った。子ども達は動作することが楽しいようで、特に“rabbit”「うさぎ」の動作は飛び跳ねる動きがあるため、飛び跳ねながら笑い声が飛び交い、楽しそうな様子が見えた。

最後は、英語教師が質問を投げかけるのではなく、子ども達が子ども達に質問を出すということになった。教師が5人の子どもを選び、教室の端に手招きで呼び寄せた。そして、集まってきた子ども達にピクチャーカードの写真を見せて、その動物の動作をするように促した。言葉は使わず“body language”を使用して手振りや身振りで伝えていた。英語教師が子ども達に見せた写真は“rabbit”「うさぎ」だったので、子ども達が手で耳を表しながら飛び跳ねて、英語教師が“What is this?”と質問をして、座っている子ども達が“rabbit”と答えた。北條 (2011) は、子ど

もの英語活動の語彙の指導として“What is this?”と呼ばれるゲームで、箱の中にあるいろいろなものを入れて子どもに触れさせたり、絵カードの一部を見せたりすることによりその語彙を導入していく活動をj紹介している。子ども達全員が質問する側と答える側の両方が参加できるように配慮されており、アクティビティーを通して覚えた動物の単語を何度も自発的に発話していた。流暢に話すことができるには、素早くかつ効率良く、言語の構築部分をつなぎ合わせるができるようになることが必要となる。これができるには、多くのボキャブラリーと文法構造を知ることが重要となる。アクティビティーを通して語彙を増やしていくことは、楽しみながら語彙に出会う機会が多くあるため効果的であると実感した。

6. おわりに

乳幼児期の英語教育におけるコミュニケーションを重視した指導法は、今回取り上げたリスニング、スピーキング、リーディング、ボキャブラリー等、それぞれに適した様々な指導方法があるが、共通事項として、子どもが英語活動を楽しみ、コミュニケーションを図る楽しさを感じ、満足できる活動にしていことが重要であることが明らかになった。子どもが積極的に取り組んだ活動については、英語の歌のリズムや言葉と一緒に体を動かすことであった。英語教師は子どもが理解しやすいように、できる限り大きな動作をするように努めていた。特に、筆者が観察した全ての保育現場でTPR（全身反応教授法）を取り入れた実践を行っており、リスニングの指導の場面から子どもが楽しさや満足感を感じることができる活動であることが確認できた。

また、子どもの日常に即した身近な題材を取り入れ、子ども自身の自らの経験と英語を結び付けやすくすることが必要であることも明らかになった。文字を取り入れた指導において筆者が着目した場面は、例えば、積み木等の遊びを通して自然に文字を認識していくことであった。一方、視覚的なものがなく文字だけのフラッシュカードには、子どもは全く興味を示さず、積極的な取り組みは見られなかった。このことから、子どもが自らやってみたいという気持ちになるような英語教材を提供することの重要性が確認できた。子どもの英語教育に関して引用した文献は、いずれも幼児期から児童期の子どもを対象としていて、児童期に限定するものではなく乳幼児の英語教育に関する研究にも反映できるものが多く見受けられた。

これからの日本の英語教育では小学校で英語が必修科目として導入され、幼稚園や保育園においても英語の需要がますます拡大することが予想される。Murphy (2014) は、シンガポールを例として、バイリンガル教育に見られる語学力の向上は学校だけでなく、学校外での要素がいかに重要であるかを挙げている。子どもが週1、2回程度の英語の時間だけ英語に触れるだけでは、母語のように英語を使用することは困難であることがわかる。しかし、保育園や幼児英語教室で英語に触れることは言語習得だけが目的ではなく、異文化に触れることも大切にしている。筆者が観察した保育現場における英語の時間は、子ども達の笑顔が溢れており、そこには、外国の人や言葉に対して臆することなく向かっていく、前向きな気持ちが表れていることを感じた。The Center for Applied Linguistics (CAL) は、幼児期の言語学習の利点として、子ども

の可能性を高めることは精神的な部分で支えとなり、前向きな気持ちはコミュニケーション能力を向上させ、他国の文化の扉を開けることで、他者理解や感謝の気持ちを持つことに繋がることを示している。乳幼児期から外国語に触れることや外国人を含めた英語教師に接することは、言語習得の観点からのみならず、日常の経験として有益だと言えるだろう。

今後の課題としては、英語活動における保育者の役割であると考ええる。保育園での英語の時間には子どもの中に興奮しすぎる子どもやいつまでも跳ね回っている子どもの姿が見られた。そのような子どもに対して、補助に入っている保育者の中には、「静かに」や「元に戻って」等の声がけを厳しい口調で行っている者も見られた。保育者は英語教師が指導しやすいように、且つ子どもの安全を考慮して、子ども達が過度な言動や行動をしないように保育者の役割に努めていることが推測できたと同時に、英語母語話者の英語教師が作り出している楽しい心地よい雰囲気が損なわれる懸念も感じた。今後は、英語の時間における保育者の補助のあり方を検討していく必要があると考ええる。

注

- 1) 「英語教育 幼稚園・保育園で高まり」『朝日新聞』2019年6月8日朝刊14版、第2東京22面。

引用文献

- Cameron, L. (2001). *Teaching Languages to Young Learners*. Cambridge University Press.
 Center for Applied Linguistics (CAL) <http://www.cal.org/> 閲覧日2019/8/1

- Curtain, H. & Dahlberg, C.A. (2015). *Languages and children-making the match: World Language Instruction in K-8 Classrooms and Beyond (5th eds.)*, Pearson Education.
 北條礼子「語彙の指導」高橋美由紀・柳善和（編）（2011：pp.178-180）.
 文部科学省（2018）『幼稚園教育要領解説』フレーベル館。
 厚生労働省（2018）『保育所保育指針解説』フレーベル館。
 Murphy, V.A. (2014) *Second Language Learning in the Early School Years: Trends and Contexts*. Oxford University Press.
 猫田英伸（2011）「音声の指導」高橋美由紀・柳善和（編）（2011：pp.132-144）.
 Pinter, A. (2017). *Teaching young language learners (2nd ed.)* Oxford University Press.
 高橋美由紀（2011a）「教材のいろいろ～チャンツ、歌、絵本～」高橋美由紀・柳善和（編）（2011：pp.94-102）.
 高橋美由紀（2011b）「文字指導とリテラシー（読みき能力）の育成」高橋美由紀・柳善和（編）（2011：pp. 160-170）.
 高橋美由紀・柳善和（編）（2011）『新しい小学校英語科教育法』協同出版。
 横田玲子（2011）「聞くこと、話すことの指導について」高橋美由紀・柳善和（編）（2011：pp.150-159）.